

# ホトトギス

七月号

ホトトギス

昭和二十一年三月二十八日運輸省特別取扱郵便誌第六二七号  
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一册一日発行)  
平成二十一年七月一日発行(第四百十二卷第七号)



## 俳句随想 〔三百二十五〕

汀子

「近代俳句の夜明け―子規から虚子へ―展」は、横浜の神奈川近代文学館にて四十五日間で六千五百名の方々のご参加を頂いて終了した。四月十七日は三笠宮殿下妃殿下にお成り頂き、お迎え出来たことは光栄であり望外の喜びであった。当日、私は坊城の姉にも声をかけ、廣太郎と小林祐代学芸員、近代文学館館長と共にお出迎えすることが出来た。宮様は先ずこの企画のために出版した図録を読み勉強して来たと仰られすっかり恐縮してしまった。虚子以前の俳句の歴史がよく分つたと仰せ頂いたことは図録を編んだ人達の努力を宮様に分つて頂けて本当に嬉しかった。

この度の財団法人虚子記念文学館の東遷企画は、この記念館が出来た当初からの計画であり、虚子没後五十年というよき節目であったこと、それに合わせて図録委員会を立ち上げて邁進したことがよかつた。

この度はよい経験であつたと思う。虚子という大きな存在を安易に利用するのではなく積極的に虚子を顕彰して行かなければいけないのではないかと悟つた。虚子が唱えた「花鳥諷詠」は俳句にとつての思想である。「客観写生」は俳句を作る時の技である。

旬日記 汀子

平成二十年七月一日 春菜会同窓会

涼しさや雲退きて退きて  
水無月三瓶の旅を近づけて  
梅雨明も近しと思ふ旅にあり  
七月二日 **ロイヤル俳優**

山荘に予約の二三山開  
まだ雲の峰ともいへぬそれなりに  
東京の峰立つ日々となりけり  
はや雲の峰立つ日々となりけり  
富士の山開と俯瞰空の旅  
七月五日 **芦屋ホトギス会**

七夕の夜空仕上ぐる企画とや  
サンガラス旅の用意の出来上り  
結局は汗の目覚めとなりけり  
健康な笑顔揃ひぬ海開  
七月六日 **関西野分会**

海開待ちて旅路のととのへり  
存在の青鬼灯と知るまで  
気づかれぬ青鬼灯の育ちゆく  
七月六日 **下萌旬会**

雷雲の駆け抜け風の森となる  
雷神に追はれし記憶甦る  
玻璃越しに風を見てゐる夏館  
夾竹桃咲く思ひ出の中に居り  
七月八日 **大阪倶楽部**

本当の汗の笑顔を見逃さず  
雷鳴に出掛けるしほを計りをり  
六甲の稜線消してはたた神  
汗見せぬこと徹して立つ濡れ  
雷の置いて行きたる雨に濡れ  
七月八日 **綿業倶楽部**

日傘さし一人の世界生れけり

山路とはすなはち月見草の道  
七月十日 **清交社**  
炎天を夜の星空につなぎたし  
未草朝の山形見の白を抱く  
虫干のつもり形見を着ること  
手に入れし短冊加へ土用干  
炎天に出て行く人に声をかけ  
旅心や姫逃池をのりしもの  
草干やあれほど探しをりしもの

七月十一日 **工業倶楽部**  
梅雨明と思へば思へさうな晴  
夏炬燵に山雨に濡れし身を寄せて  
梅雨明の待たる旅でありしこと  
もう都心梅雨明けしとも明けぬかと  
七月十二日 **石見ホトギス俳句大会前日旬会**

郭公が鳴いてますよとすれ違ふ  
涼風を乗せて下りの空リフト  
汗の顔よりこぼれたる話かな  
七月十三日 **石見ホトギス俳句大会**

怖いもの見たさに蛇の所在問ふ  
七月十四日 **アサヒカルチャ**  
汗ぬぐふことより返す旅話  
帰路の組語似たりよつたり旅涼し  
草原の露を踏み来し旅の靴  
七月十五日 **有恒倶楽部**

青葉濃しとは幾山路抜けしこと  
山宿の百足虫の這へる音に覚め  
立派古にもよみがへる浪花あり  
露涼し尽きぬ草原踏み行けば  
刺されたる記憶の隅にある百足虫  
夜涼恋ひ星を仰ぎて来し旅路  
七月十五日 **無名会**

雷を抜けしドライブ六時間  
旅話少し大きく汗ぬぐふ  
六甲を覆ひ尽せしはたた神

汗拭いて今口も過ぎたる思ひかな  
美しいもの見たさも少しはたた神  
七月十六日 **夏潮旬会**  
土用浪待つ若者の渚かな  
ほととぎす三瓶の旅も終りけり  
早起は旅の余得よ時鳥  
齟齬少しありしも旅の涼しさに  
手を洗ひ取り戻したる涼しさよ  
七月十九日 **北海道ホトギス俳句大会前日旬会**

東京の朝曇発ち来たる蝦夷  
じり深き蝦夷の大地に降り立ちし  
やはらき蝦夷のみどりに抱かるる  
七月二十日 **北海道ホトギス俳句大会**  
懐古てふ消してはならぬ涼しき灯  
一塊のみどりほどけてジャンプ場  
蝦夷を去る暑さの待つてぬし家路  
七月二十四日 **きつね会**

すぐ次の旅の計画合歡の花  
咲き満ちて合歡の花濃き三瓶かな  
夕立を待てぬ水遣りはじめけり  
汗引きてよりその話聞くことに  
夕立雲見つる街覆ひはじめけり  
合歡の花見つるこれより山路かな  
七月二十五日 **時雨旬会**

露涼し蝦夷の旅路を語るとき  
雲の峰崩し一雨欲しきかな  
東京の空片寄せて夕立雲  
香水や故人の記憶新しく  
香水の一人満席なりしかな  
竜巻の予報も加へ夕立かな  
七月二十七日 **野分会**

待つてゐる来たる訃報の露けしや  
とび込んで来たる訃報の露けしや  
七月二十七日 **悼大崎石城様**  
悲しみ一つのるばかりや蟬時雨  
尽くされし数々謝して夏の月

尽くされし数々謝して夏の月

# 廣太郎句帳

## 廣太郎

平成二十一年七月一日 一水会

古簾越しに女将の真顔かな

七月三日 蕉心会山中湖吟行

藤椅子を出すより句会場となる

八方に清水放ちて富士の黙  
富士よりの風炎帝を遠ざけて  
虚子山廬句碑は涼しく苔むして  
雷か大砲か否虚子の喝  
通し鴨光囿めいてをりにけり

七月十日 土筆会

落し文父の存問かも知れぬ  
砲声に富士の雪溪揺るがざる  
羅の彼女を偲ぶ句座として

七月十一日 浜田吟行会

山陰といふ万緑の濃き方へ  
万緑を突き抜けてくる鳶の笛  
木下闇城の盛衰知る一樹

仇討ちを今に伝えて墓涼し  
山陰といふ涼しさに明るさに  
涼しさは虚子の辿りし辿りより

七月十三日 石見ホトトギス俳句大会

梅雨晴や今夜の星を期待して  
郭公に近付いてゆくりフトかな  
汗引いてゆく標高となるリフト  
満天の星の化身として蛍  
草いきれ払ひハーレーダビットソン

七月十四日 朝日カルチャー若草句会

草丈に沈んで行きし日傘かな  
草原といふ鬼百合の孤高かな  
一輪の百合に山気の従へり  
さしくれし日傘に恋の予感かな

七月十五日 草木瓜会

百合の香に聖母子像の微笑めり  
黒百合に夜の帷の寄り添へり  
鮎鮎や近つ淡海の世を偲び  
別れ道山百合の香の方と決め

七月十七日 登高会

苔清水老柳荘はあの辺り  
摩天楼西日を西に弾き出し  
向日葵と八頭身を競ふ君

西日受けつつ行きつけの店は地下  
大西日風水といふ丸の内

七月十九日 北海道ホトトギス俳句会

蝦夷といふ気温十九度の盛夏  
異国めく涼しさ異国めく家並  
もてなしのポプラ涼しく刈り込まれ  
万緑に突き刺さりたるジャンプ台  
涼しさを蹴り上げて跳ぶ女子選手  
この風に網戸の欲しき泊りかな

七月二十二日 若水句会

風といふもてなし蝦夷の夏館  
月見草目覚めさせたる鶴の声  
東京の汗を忘れてゐる泊り  
汗攫ふ北の大地の風に会ふ  
夏館蝦夷の大河を母として  
月見草魑魅と対話してをりぬ  
昨夜の雨使ひ切つたる月見草

七月二十三日 目黒学園句会

虹立てり都心のビルを低くして  
夕虹の立てばあなたと会へさうな  
骨切を見せて老舗の鰻料理  
夕虹を突き抜けてゆく蝦夷の旅

七月二十九日 七月二十七日大槻石城様御逝去

# 雑詠

## 廣太郎 選

百寿なるわれにも在りし春の宵 たつの 浅井青陽子  
 卒業の日のお天気もまだ記憶 同  
 句碑あらば歌碑もあらばと梅苑に 同  
 シリウスの瞬き天を凍らせて 神戸 涌羅由美  
 著ぶくれし人柝席をはみ出しぬ 同  
 初場所や横綱の意地突き通し 同  
 雪女鏡を持つてゐたといふ 福山 竹下陶子  
 人の世の詩詠みに来し雪女 同  
 寒明は地球自転の一部分 同  
 あの恋でこんな子猫の生れしか 東京 大久保白村  
 花街の路地に隠るる子猫かな 同  
 子猫抱く宝物でも抱くやうに 同  
 冬苺一粒ほどのことば待つ 神戸 山田弘子  
 少年の声にほぐるる猫柳 同  
 泊月の村を包める野火煙 同  
 虚子叱る子規の文よむ鳴雪忌 榎原 稲岡 長  
 呑気さは彼に負けずよ鳴雪忌 同  
 瓢逸といはれてみだし鳴雪忌 同

地震に覚めもう朝寝などして居れず 神戸 千原叡子  
 地におろしたる盆梅に混み合へる 同  
 森は水甕と教はり木の実植う 同  
 白の香の紅の匂ひの梅に寄る 八尾 岩垣子鹿  
 浅間火を噴き路の臺背伸びする 同  
 糶といふ浮世の外の桜鯛 同  
 いぬふぐりとは一塊を探るもの 香川 湯川 雅  
 のどけしや波音耳に詰め込んで 同  
 下萌えて園の芝生を乱したる 同  
 彼もまたつひに欠勤春の風邪 京都 安原 葉  
 池普請濟み何事もなき庭に 同  
 春寒きけふは寄りみちせぬ家路 同  
 青天を近づけ梅の花咲ける 熱海 嶋田一歩  
 梅咲いて空の大きくなりけり 同  
 散ることの多くなりしと梅見茶屋 同  
 近道と云ふは崖径路の臺 同  
 携帯で居場所報告青き踏む 同  
 ジョギングをやめウォーキング夕桜 同  
 今少し品良く口説けうかれ猫 東京 橋本くに彦  
 毛繕ふ猫春光を舐めあげて 同  
 チューニング終へし翼や鴨帰る 同  
 卒業生入場前の椅子の列 柏  
 同窓の長兄次兄卒業す 同  
 卒業のチャイム止めあるひと日かな 同  
 同 田丸千種

## 雑詠句評（六月号より）

そういえば筆者は鳶が木の枝等に止まっているところを見た記憶がない。空に大きく輪を描きながら飛んでいる姿以外に鳶を想像するのは難しいのである。勿論止まる時もあるのは当然であるが、イメージとしては飛んでいる姿を思い浮かべる。その鳶の姿と「白鳥」の姿との絶妙の対比。（廣太郎）

城といふ大きな寒さ立つてをり 八尾 岩垣子鹿

くに彦・暮潮・純也  
一歩・比奈夫・弘子  
雅・昭代・しげ人  
仁義・廣太郎

白鳥にとんびはとんではかりぬる 熱海 嶋田 一歩

城というものはもつばら戦闘用であつたが、戦国時代以降は統治、居住の用途のほかに城主の権勢表示の役をした。したがって多くは平野を望む丘の上に建てられている。寒さというものはその権勢表示の役割や要素を拡大して見せる。「大きな寒さ立つ」そんな城主の意図を示しながら、しかもその意図をやわらかく包んで、表している。作者の作句の力量を感じさせないようにしながら感じさせる、まことにたくみな叙法である。（暮潮）

作者とは一度ご一緒に吟行させて頂いた事があるので、この城はどうしても大坂城を想像してしまう。徳川時代に、それ以前の秀吉の頃の城を改築してしまつたらしいが、やはり関西人にとっては豊臣家のシンボルなのである。季題を、そんな城の栄枯盛衰に重ね合わせるのは極端だろうか。（廣太郎）（以下略）

鳶を見るのは、おおかた空に弧を描いて飛んでいる時である。まさに飛んでばかりいると感じる。タカ科の鳥なれば脚に鋭い爪を持ち、獲物を見つければ一直線に降りて来る身のこなしは、目を見張るものがある。一方、白鳥は幼児の絵本をはじめとして誰でも知っている鳥で、鳶とは対照的におっとりしている感があり姿は誠に優雅である。掲句の白鳥は水面にいたのであろう。水面と鳶の飛ぶ空の高さ、鳶色と純白、そして鳴き声の対比。鳶を語り、白鳥を何も語らぬところに季題の有り様を讀者に想像させる。（くに彦）

# 天地有情

# 花子選

かけのぼるとんどの炎日を吞める 福山 竹下陶子  
 星亘て、森羅万象動かざる 同  
 旅いゆく加賀の黄昏たびら雪 東京 大野雑草子  
 手に受けて解けてしまひしたびら雪 同  
 日に研がれ星に育ちし軒水柱 同 稲畑廣太郎  
 軒水柱 零下三十度の刃先 同 稲岡 長  
 雪しろに溺れさうなる小さきダム 榎原 稲岡 長  
 五十猛の播きし樹種は紀の国に 同 嶋田 一步  
 蓬とは母が教へてくれし草 熱海 嶋田 一步  
 蓬摘む母ぬし確か父もぬし 同  
 こぼれたるごとく散りたる冬紅葉 京都 安原 葉  
 虚子没後五十年来る梅椿 同  
 豊年を約せる幅の大つらら たつの 浅井青陽子  
 いき活きとわれを迎へし雛館 同 同  
 ふと舞うてふと舞ひ止みぬ春の雪 箕面 井上浩一郎  
 舞ひそむることとははかなく春の雪 同 同  
 頼る者一人とて無し爽やかや 豊中 瀧 青佳  
 もう死ぬと言ひふらしては年を越し 同 同

伊吹見え竹生島浮き春めける 吹田 宮崎 正  
 波の音一つなき湖春の夕 同  
 思ひ出はあたたかきことのみならず 東京 今井千鶴子  
 目をぎゅつとつぶりし奥の春の風邪 同  
 二日灸二日酔にも効きにけり 神戸 三村純也  
 花早きことを喜びかつ恐れ 同  
 下萌に雨降り雨に下萌ゆる 同 長山あや  
 散骨の水辺明りに木の実植う 同  
 沈丁の香を置きざりにして通る 熱海 嶋田摩耶子  
 摘みごろの蓬はこゝに今年また 同  
 紅梅の館に漲り来たるもの 神戸 山田弘子  
 人声の集つて来る濃紅梅 同  
 慕ふとは青き踏むこと墓前祭 熊本 岩岡中正  
 うべなつてをり人の死も春寒も 同  
 その先は湖野火は気にかげず 東京 河野美奇  
 火が風を風が火を呼ぶ野焼かな 同  
 湿原の黙極まりてのすり飛ぶ 徳島 上崎暮潮  
 人去りし臘梅の香となりけり 同

# 天地有情句評

汀子

雪しろに溺れさうなる小さきダム 榎原 稲岡 長  
雪しろの恐怖。

蓬とは母が教へてくれし草 熱海 嶋田 一步  
母との懐古。

星冴て、森羅万象動かざる 福山 竹下 陶子

冴てついた星空に包まれた大地。

こぼれたるごとく散りたる冬紅葉 京都 安原 葉  
鮮やかさをそのまま散り置く冬紅葉。

旅いゆく加賀の黄昏たびら雪 東京 大野 雑草子

大片の雪の中の加賀の旅情。

豊年を約せる幅の大つらら たつの 浅井 青陽子  
大氷柱の幅が語る豊年。

日に研がれ星に育ちし軒氷柱 東京 稲畑 廣太郎

解けては育つ北国の軒氷柱。

ふと舞うてふと舞ひ止みぬ春の雪 箕面 井上 浩一郎  
春の雪らしい降りざま。(以下略)